



叙



夫風流の道いつまのんぞ種とくくふのまはれ  
 さ萩松の葉のらうとん濱のまゆを救はは  
 せり一軒載ゆ今俳諧の流る祿哥世  
 りとる事の中古お恥す予やうははるそん  
 いとと友とと南世とと交る許よ二とみ  
 流ひく浅草なる雪名をねと、麻と詠と

例の清談刺とてうへに容を困を得まはるゝハ  
宗と夫ふあはれおやく主のいそしく世人對座  
する耐寒暑の毒を返と申あはるゝと世のぬ人の  
味をうとて申入るゝあはれ難法ゆゑ多し既し  
古箱も奪てゝ一の禁めつうりや民社も甚せん人  
とてこれ日銭費せんともあはれなるめさへるゝか  
英席ももつてこれとての清談も地帯もあはるゝの

おしと好ま隙家なる好人一あまを振るは時の  
糸物を好み執うたたととら古人の風流を獲し  
く番ひくとも定むらもも句法懐くして閑實れ  
今も勝負をあはるゝたはるゝあはるゝあはるゝ  
とつと寶くするの意も別とて人々自若し  
しと寧ま入るゝ衆儀判法盟補してやのひ  
純きはり中へもあはるゝあはるゝあはるゝあはるゝ





二番 梅

大黒晩箱  
黒

左

梅咲やさん旭の丸此中

逸窓

右 勝

ひ失さやまのぼろりき水の池 黒人

左一枚鏡の紅摺のまゝ 近來旭大黒天とよ像も  
長く長く伝仰為らん 大黒は 小比せハ今  
おし能土地に梅交り  
右本宮此谷川の香解水高馬の泡立流る余をの  
餘情ありて大黒吹輪は比せハ二種ハあましく耐え  
身一水抜き馬さ方より うれハおそれ  
一詞一依の重いとゆくと 傍と白

三番 春鳥

十日早稲  
四十日早稲

左 持

鶯乃儿懐子 依や小紫垣 以席

右

うさぎやうさぎ家よのふ緑 菊露

左紫垣と鶯の儿情とハ細工色なる立ま  
十日早稲も厚くなく出る十日早稲も穂も  
十日早稲は厚くなく出る十日早稲も穂も  
右か乃の毛色の形容よりハ世々常なるハ  
何玉の川草木もみりなるハ 四十日早稲  
ほろり敷かんと持

四番 霞

尤持

小上穀

洲四くくハ比敵のゆふ露の 林鳥

右

弱きのきけくくく 時人

判者ヤた右の句不易けくく風情おまを俳意

為さう大上穀小上穀ハ晚梅すてむくく上稻く

穂大きく米もよ也然まも斛穀とれも穂毛見とゆく

勝負と定むくく一とせ六と菴巴静東武よ下り

一小子に十六篇とよくく内よやく場とえりもそくくは

世人に十六篇はくく世の述化すもくく又あは地くくくの

苔の巻れくく巴静くくく角はくく巴静くくくとあや

りくく記す

五番 柳

大柳花箱

大唐花箱

尤勝

角大師 句い 今くく 柳の神 逸窓

右

風けしなぐ池のくくやあふく 徳布

左巻巻の軒此柳あいもくく角大師法く付く

守り法くくすくく仇法ハねくくくく大柳く

咲指白くくくく大言く豊くく斛穀もく

くくめてく揚くくせむ

名なげくく此のくく法ふなくくく俳意く

池心くくく詩語にくくくくく大唐く

くく

六番

朧月

二力も箱

丸持

わんげ月朧月のせりけり

菊露

右

似る顔と見くけりて無 朧月

林鳥

吾似て魚の如くすもふおろしの月情ハ

まろくもく夕ぼりし...の百練

うんえ

右去雨の情百も難なる日も

きりけハまろぬ...にほろ月情も

張ぬまやと助おくの...地を

後と梅...の...  
...

七番

白魚

白稲巻箱

本白明箱

丸

白魚や塵撰る兎の尻もき

桃丸

右勝

月の寄きは 玉寄子舞の心矢が

徳布

丸白輪ハ通例のたくてあく茶ハ

まろ...一辨す右...  
...

右平白粒の莖白さ力よ名付く

中着まろ 斛粒...  
...

せろまろ...流り...  
...



八番

涅槃

西目境稻

左持

うつろひや目も傾くや涅槃像

以席

右

天竺の灯きえく祐んか 黒人

双方ぬ國稻子

初

地と換く起白法

極

第少燈

九番

蝶

唐帽子の乳

玄宗手

左

蝶くや竹の竹の花 野人

右勝

蝶く小裏門の的く日和ふ 桃丸

た松くくくハ巻れきんす

地くくく出まふまらも唐帽子稲子や

右忠ひ行幸なみの粟日の糖人不易に

白外の余情くくゆくく玄宗手

又ん小橋くハ勿論くハけ稲の位ハ本云

くハ成くく累す

十番

蛙

會津免稻  
津輕脱稻

左 持

あういゝ勝術と鳴く蛙うぬ

逸窓

右

啼くと寝まは寝らるゝ蛙うぬ 黒人

會津松く

津輕おく

熱くは二種ハ地面より

所へ地出ハく時ハ

あき時ハく

十一番

菽入

朝野  
いこ

左 勝

菽入の夕日とまきく力なり

前露

右

屋婦入やん此伸の夜小のり 時人

左日と三全以歸寸故夏城さひ入く名あたり

余情感り拓くちりなきとまよふちりちり

友事小信く経程ゆは

右も余情あれと情とまきくしりめは

為しちりも慰み程と朝野ハ葉穂と

紺也紫菅蒲のさき

うくやもふくさむ

十二番

田螺

新大衛門稻

左持

花の咲かす戸のめくはり

以席

右

鳥の如くあそぶ田螺式

林鳥

左もよまきし事なく三例の  
飯向なり新左衛門稲も  
稲も白く白くはすし  
あそぶ鳥

十三番

櫻

藤兵衛稻

左持

花の咲かす山を移す様

徳林

右

眼の光あつたのや初さくら

桃丸

や月ハ移すなまも理屋めが  
くらのけりも古奇の玄葉ふく  
後と後稲も通例も土地  
まきし  
今も  
持

十四番

苗代

美濃五郎稻

九持

苗代や國常立此玉の茶

黒人

右

なま〜ろや怒〜の亦乃水加減

林鳥

玉堂之の玉如曇と理と結

風流〜〜〜ぬみの外〜〜〜加減も

〜〜〜の〜〜〜

美濃五郎稻〜〜〜

今〜〜〜も〜〜〜

十五番

更衣

笹野晚

村田晚指

九勝

髭青〜〜〜髭青〜〜〜衣〜〜〜

途窓

右

下戸な〜〜ぬ男〜〜〜文衣

林鳥

左母の竹葉〜〜奥家老の山仕乃

〜〜〜大〜〜〜く〜〜〜足〜〜〜ん〜〜〜上〜〜〜

〜〜〜も〜〜〜斜〜〜〜救〜〜〜一〜〜〜向〜〜〜取〜〜〜止〜〜〜さ〜〜〜れ〜〜〜今〜〜〜

〜〜〜と〜〜〜も〜〜〜人〜〜〜品〜〜〜

右同〜〜〜家中の村田何某〜〜〜

〜〜〜冷〜〜〜水〜〜〜の〜〜〜

十六番

時鳥

本道寺平稻  
香がー早稲

丸

痛く痛くもろき尻をほく

黒人

右 勝

初音短く侍のかひあり郭云

徳布

左意も長湯も去る時八人の空なる一さ生は  
内一ささかー遠はつひ中より出羽湯屋山の地舞  
本乃寺村よりゆる種の上地ふよと地是は高より  
右初音香短く侍一甲斐よりと八風情を及一  
園中の余情猶きさうやさういひ稲の対より月ひ茶以  
すひ香短く古茶子交一ま不古茶も新茶の如  
くや一句の美り茶ふ一

十七番

若葉

大音穀  
小音穀

丸 持

橋より山おとれーきみ系哉

以席

右

不足なく山とのみくわの葉は

時人

むしーうりもろ稲

甲乙なまーうりもろ稲ありとわれ

時人

若葉あまは青の字乃もろれと

評次

十八番 牡丹

左持

赤返り  
白返り

世に花の咲くは 咲きぬるは 牡丹

桃丸

右

凡そ花の重なるは 牡丹の 時人

は二種より 蓮も水損早 咲くは 牡丹

上条 斛敷も 甲乙 赤く 牡丹

すくは 牡丹の 白く 牡丹

赤く返り 赤く 牡丹

牡丹も 牡丹の 牡丹

牡丹は 牡丹

十九番

初松奠

雪ノ下 晚稻

左持

月れらば 何の 牡丹 逸窓

右

一釣瓶 藍花 牡丹 菊露

本何の 牡丹 牡丹

右の 藍花 牡丹

下は 牡丹 牡丹

牡丹 牡丹

二十番

閑子鳥

節黒晚稻

左持

我ひくくさとりかりあかん

林鳥

右

不子鳥 廬山 雨夜

菊露

稻のゆゑ一黒ふくく名付し

斛、取りもろり但一瘦比こ甚

嫌ふ肥さ

あふもに瘦く皮とろく弱く

細一依之持し

二十一番

競馬

猿毛晚稻

即毛曲晚稻

左持

ニッ 船の燕を遅く馬

黒人

右

鏡子 鞭も草蒲に我さ

時人

た名とあまこ

く馬なまて母毛曲り猿毛

なう魚く持を

二十二番

五月雨

溢晩福

丸

六月面の晴日も思しく福の松

以席

右勝

さみくまるも隣へ見く川向ひ

桃丸

右幾りもなく障子障子も基友を八川  
 向ひは又ゆれと泥詰る滑り後しかみか  
 後却り日と消したる雨風の余余情路なく  
 後まるくしたるありまる福の何れももま  
 ても色例の余余ハ取れるくし福の子の指文  
 丸のまるくし  
 左五月雨の杉ハ思はるく下し是の福のまるくし丸の

二十三番

蝸牛

御所綿帽子襦袢  
長泉寺福

左勝

地牛をとしのる此の世の小

徳布

右

井乃のあらにさりくる人のあらう

林鳥

左五七五の詞よく祐まるく風情面なく  
 優美なる清朗ほくくしる福来  
 極上のくし候小揺る祐の事の福  
 めくくの如し掛まりし  
 右土地面を思はるく度々和心のまるくし  
 長泉寺のまるく福も人唐福の如く  
 土地を撰りしる



二十四番 竹婦人

細葉晚稻  
赤細葉晚稻

左 持

是言此風とて、孫や竹婦人

菊露

右

痛精も人もやとてよ竹婦人

桃花

左風とて、孫人かそぬ、

一醉細葉稻よく、咲給ふ

斛 秋取

右候名のあゝ風味よとて、

斛とて、一醉河まら平め、

持あ

二十七番 立秋

仙臺糯稻  
北国糯稻

左

妹立や秋、腸此とまり、

菊露

右 勝

打水の音乃と川を今朝の秋 黒人

左勝のまゝと一奉りまゝ人の言

ひ

右音のちあゝり、清い出とて、立秋の節の

初涼ハ起向対と、待たさうや他と、

飯向ハ別、小つとて、仙臺糯稻丈、

低く、漸米とて、教取、

殊外、仍り、能輪く、才一、柱、時と、嫌と、

二十八番 一葉

赤襦  
孫助襦

左持

のりくはと隣へきき一葉小

桃丸

右

かきりく暮ぶ名せり一葉小

林鳥

心つれも地ふりりく

かきりく

しき持をくむ

二十九番

朝顔

咲ミ咲ミ晚ミ榴

左持

草や波の車は幾釣瓶

徳布

右

阿さくわやねむ芭蕉よ日乃と海邊

以席

左ミ咲ミりくくあねの花を水車に尺尋ふ  
予く白小あれと是ハ等敷のくく下あり  
但し下ふ文字是らぬ

右ミも然の葉かられをたのむ草とふりや  
いつまも咲ミと咲ミし猶も似く夕アに口せ  
早朝より咲くくあきく持と席

三十番 魂祭

虚空藏晚稻  
六部晚稻

丸持

涼〜さ百味の弁やそ海象

桃丸

右

晚涼乃定ぬ下やたま海つり

菊露

両章為差甲乙モナニ釋ノ稻之  
名ニ而持トス

二十五番 納涼

玉川晚稻  
名取晚稻

丸勝

星乃形よかへ棹さひすゑ式

以席

右

常解く風抱く脊戸の涼の家

黒人

左わしおふ方へと風乾の道遠何となく  
余情ありまうこれ五文字に俳諧の魂居り  
ぬる熱忍のこゝに後赤くぬく度入の案に  
返る上糸なれと猶もす  
右是も一家のを支れ湯ありの風情紅  
縁のこゝに志れもむじ〜とありませ。  
稻も〜中位にいれもる

二十六番

清水

関東稻  
美濃糯

左 持

地むし川 劔とくく乾 清水哉

逸窓

右

いさねさきさきのし生ふるしと下

徳祐

左其角白雲々若盛の句振くすれましく面白

れしも荒時の流けりよハ曲るていん実赤稻とく

大上稲とく又いさ下ももろ長く水く略す

右及法風の匂ありりうく五筑ふりこれ風哉

りや依え天濃糯の粒もく揺るもくねと

夢とく葉菓子のもせよ飛とくやとらうも

結ゆとハ

三十一番

虫

八田一鉢晚稻

葉隠一挽稻

左 勝

虫の喜け石をもろしり歳秋の

逸窓

右

物乾く風情 世をくくむじの夢

時人

た八田一鉢ハ大言く葉太く粒大く

上葉一旬の躰もかくのくく石とと

うく川と強さ頂羽も後まら秋

右葉隠一は葉の筒の内もく實の

の稲とくや風情もくく物乾く

風情もくちとたふ屋みん

三十二番 雁

賴子奥稻

左 勝

松林老色志まりるるの夢

時人

右

く月ノや一雨すくる室の寂

徳布

徳木ハ松ノ後ハ松林より喜ぶ

秋穀の糸色ノ下は松林丸合ノ下

賴子稲ハ奥州の土地ハ能く育つ

甲乙なると不易の稲早損水損すも

はるばるのうらみも一畝後の欠の

寂ハ古古しく古米の味ハ新米乃方

勝すも

三十三番

渡鳥

屋樂晚稲

左 持

昇越くくかきくやくく

追分

右

幸海の松風らるや渡り鳥

林崎

鳥らく晚稲を解く較この外

そはくも一も米和るに

りくも能持るに

三十四番

穿山子

倉餅

丸持

隣田も法合歌のわたりか

桃丸

右

世の老と先へ又さるる葉ふみ

林鳥

観音の謂は敷戸倉飯稻ウル  
似く解取ハウウウウウウウウ

左

三十五番

名月

巾着箱

丸持

名月や此も付々と巾乃歌

以月

右

草あゝに花の月あゝあゝあゝの月

時六

跡もつくも数ひ

ちの月まゝめてと

白くもくくくくくくくくくく

粉骨奈——持

三十六番 礎

金餅

右 持

ねりし宿やうらむ石の

右

味し置き流きまぬさし 菊露

地辺深き肥地へ修。籠なり

あふともち地とあらし

こやしをまきし 竹の

三十七番 鹿

倍及雄鳩正晚稻

雄雀濡

右

細帯にらりしをふ取や麻の夢 徳

右 勝

麻の聲 膝を抱ふ法師あり 菊露

たゆまの力をまゝ集作りやうの覚悟は

満しきもふひやれゆ

右對しうきは姫持りち稲ハ大言くすこやう

延ひし痛大さく上稲し餅子搥くし

祈りるをくし一白結祈る、金結はまき

三十八番 菜

小夜晩稻  
黒晩稻

丸持

荒くく菊一伴の日和

右

かき家やるさしく霞加  
黒人

左小夜上菜也此逆能取植書ハ  
流川の場一棹  
右月出中通う此稲も種ハ丸  
古めくく持

三十九番 時雨

白晩稻  
小白坂晩稻

丸持

日の御ハ雲おのしく時雨危  
桃

右

荒くくおん、雲おのしく時雨

左一句ちし加くく 初る氣取さく白坂米  
丸く至く堅き米し能稲也  
右青穀同取す、余夜おく菜ハ上々  
右まきし、星かす降く雲おのしく時雨危の  
半くやん米あきし、時雨危

徳布



四十番

落葉

惠美須稲

蔓引稲

丸

許

あゝうも淋し〜馬ふ為共

右

たのしみを綿を巻く草

林鳥

蔓引ハ大唐稲ト同シ

惠美須ハ大黒稲ト同シ

四十一番

風

徳姉

福徳稲

丸勝

あゝ〜や遊か〜め〜牧の駒

徳

右

風や空遠き〜川〜山〜

菊露

左予先年下徳中頃の徴

目前の安ん感〜勝手迄姉稲丈

穂大き〜叙〜海〜

徳安馬

右山

福徳何主の〜

四十二番

進時鳥

近成り時節

左持

かゝるや恨、時とけしうい

しり

右

かゝるや恨、時とけしうい

逸窓

左持の時とては他者の御あへんや  
時とては鳥の名はひらきしりしり

右持守殿誰かのかゝるや  
近成り時節とては風味のしりしり

四十三番

枯野

奥進

左持

鳥の巢のひらきしりしり

桃色

右

月一ツかゝるや、時とけしうい

黒人

同断ふしり

古来ありしり

四十四番

千鳥

紅近成

左持

風のなうと松よりうらやみ

山人

右

雲風と入かりの夜やむらさき

黒人

あ品の近成りの穂大きき白く物

はを成る紅のこころも赤ハ近成り

回成る風味如

四十五番

水仙

多田久早稲

二白早稲

左持

吸よとるをりさす水仙舞

逸窓

右

彩色の柳小徒時や水仙花

時人

左多うく色倒の子穂より長く持て

物々々々同時よ

右二白早稲ハうけれもや

今ハ候

四十六番

達上志

紅葉糯

石破糯

左

冬の月

桃丸

右 勝

多る海急や枯地の中は松の色

時人

左指歌去し一月に振、何れも去し

こゝぬまの白老細系餅の如く今也

揺るるるるるる

右何れも枯地の中の松の色と本時

見出し、石破餅の甚く堅く、

ゆるゆる上候、んと、

四十七番

河豚

熊餅

左 持

ふく汁又一間のくちを小長

黒人

右

河豚汁や上 焼き、二三尺

菊露

熊餅稻地所示依而作レハ甚能餅也  
西章共尔地於、扁志

四十八番 雪

鍋冠糰  
御座糰

丸

喜代目や花よりどり傘の下 逸窓

右 勝

くくくハ鶺鴒なきハ今朝の音 林鳥

左 化例す古くくくくもか

鶺鴒の音も穂もまきくくハ吉原の音

鳥の音とくくくハ対くくく

右 せきくくハやく見届くくくハ

四座色餅の音くくハ 餅くくハ 餅くくハ

車くくハハ 餅く

四十九番 鉢敲

籠餅  
菱餅

丸 持

盆文取の底くくハ餅敲 以席

右

餅敲くくハ 帝鳥の友もれ 徳布

くく餅くくハ 外餅くくハくくく

くくハ 餅くくハ

餅くくハ 何くくハくくハ 餅くくハ

餅と餅くくハ 餅くくハくくハ 餅くくハ

餅くくハ

五十番 年籠

德寶晚稻

九持

福壽草留之の身りや年籠

菊露

右

琵琶乃音より一陽来るる巻

逸窓

中一筆味。多味。一。秋の百は新来ハ  
牡丹條ふ。く。もろ。一。斜。江もろ。一  
同。ゆ。く。と。喜。と。馬。る。巻。軸。恭。清。下。腹。靴  
と。折。く。未。永。く。世。ハ。終。く。一。判。者。ト。ス

### 跋

中言々る里番ひくこれ句合安祭て  
世の中へ芥子金を種河を穿とて  
激尔古雅に其情も信をく海井の  
一素隠士のくく此自解より古今  
乃分舞ありまじし其案ハ皆自己  
の字力なり。み文章をかき。古事

古被源氏狭衣清句禅流字い  
こ奠の〜〜生る入きれおの道成賣  
その志ありきじ〜〜母名  
乃主人能の終なきの〜〜子十歳  
城鑑<sup>予</sup>予 亦判るよ〜〜老衰は億  
樽也此免毫尔およ〜〜寸再之辞  
い〜〜心ゆ〜〜次あねのら尔きちらかふ

とま〜と判詞中〜系厚れ方もい  
願おなき酒も知〜寸増〜和遠文ゆ  
〜〜を思ひもかきぬ老悦何致め  
刺〜んらね〜又志ぬ〜辞〜も礼尔  
〜〜さすは〜い川比陸雲乃素存  
れ〜の稻乃記をゆ〜ん是致様  
〜河さ〜島古地起向の〜

我が心もあはれしと千載もあはれしと  
取らば一はく遅暮の懶性唇をか  
御のさへ、年ふたへしと  
雪かけし。此素丸向旭楼音軒の  
りよよ自書



二万の己年 亥月

東武浅草

無名彦桃丸輯

天明五己年 初冬

此主飯田七良右衛門

江都書肆

本町三丁目

西村源六板





